

私の幼稚園

水島さゆり

――養蠶の巻――

園長さんと、幼児一人の幼稚園。園長さんは私、幼児は同じ塀の中の隣家の男の兒、名は時雄、六歳。二人の會つた處が隨時キンダーガーデンとなる。

時雄「水島さん、遊びましょ。」

園長「いらつ、しゃあない。」

時雄「はあーあ。」

時雄勝手口から這入つて来る。園長居間兼客間兼書齋での書見を中止して、ニコニコしながら、狭い縁側へ出る。時雄とりつく。近處のシヤモが一聲高く時を造る。

園長「『トキヲサーン』と雞が鳴きましたよ。」

時雄「アハ、、、、あの雞は時雄の名を知つてゐるねえ。」

園長「知つてますとも、此處へ来る雀だつて、『トキチツチ、トキチツチ。』つて鳴きますよ。あんまりよ

く知つてゐるから、水島さん驚いちゃいましたよ。」

時雄雀は來てゐないかと、一坪餘の庭の方——二三本の細い木と、隣家の屋根とが、間の板塀の存在を無視して押つくらをしてゐる——を眺める。

時雄「アツ、蓑蟲」

團長「蓑蟲だ、採りませう。」

時雄「うん、採らう。」

蓑蟲楓の枝から一尺程ぶら下つて、いさゝかの秋風に揺られてゐる。着て居る蓑の中に、葉つ葉のかげらの並はづれて大きいのが交つてゐて人目を引く。

團長「水島さんがうまい工合に採りますよ。」

時雄「時雄が採るんだ、時雄が先へ目附けたんだよ。」

團長「水島さんだつて時雄さんと同じ時に目附けたんですよ。」

時雄「だつて水島さん黙つてたぢやあないの。」

團長「さうね、ぢやあ、チャンケンしようね、勝つた人が採るのよ。」

時雄「うん。」

二人「チャン、ケン、ボン。」

園長「ほら水島さんだ。」

時雄「つまらないなあ。」

園長縁側から手をさし伸して、蓑蟲の絲を、見當て握り、時雄の目の前へ蓑蟲を浮かせる。時雄

蓑蟲を縁側へはたき落す。

園長「アッ、蓑蟲がびつくりしちゃいましたよ。」

時雄「痛かつたかしら。」

園長「痛くて、痛くて、泣いてるでせう。」

時雄「蓑蟲つて鳴くの。」

園長「鳴きますよ、聽いて御覽。」

園長蓑蟲に近く縁板へ耳を着けて聽いて見る。時雄真似る。

時雄「鳴いてゐないよ。」

園長「鳴くんだがなあ、どうしたんだらう。」

時雄「何て鳴くの。」

園長「父よ、父よつて鳴くの。」

時雄「チ、よ、チ、よつてなあに、お乳のこと。」

園長「ちがふの、あとつちやん、あとつちやんつて事よ。」

時雄「なぜあとつちやん、あとつちやんつて鳴くの。」

園長「それはね、養蟲のお父さんがね、此の養を着せてね、『養蟲や、今にな、秋風が吹くやうになつたら来るからな、あとなく待つてろよ。』つてね、養蟲を置いてけぼりにして、何處かへ逃げて行つてしまつたのよ。養蟲は置いてけぼりにされた事を知らないもんだからね、あとなく待つてゐたのよするとね秋風が、カサ、カサ、カサと吹いて來たの、養蟲はね、『アラ秋風が吹いて來たわ、あとつちやんが来るわねと思つて、『あとつちやん、あとつちやん。』と呼んだのよ。でもちつともあとつちやんが來ないでせう、だから、何遍でもあとつちやん、あとつちやんと言つて鳴いてるんてすつてね。」

時雄「ヤア、養蟲が頭を出したよ。」

園長「さはるとひつこめるよ。」

二人養蟲の頭の出沒に興じ合ふ。養蟲養から半身を出して少し這ふ。二人益々興じる。

時雄「養蟲裸にしようか」

園長「あとつちやん、あとつちやんつて泣くと可哀想ね。」

時雄「なぜあとつちやんばかり言ふの、お母さん無いの。」

園長「ほんとにね、お母さんはどうしたんでせうね。」

時雄「蓑蟲の蓑から葉つ葉の大きい斷片をちぎつてしまふ。小さい斷片も幾つか取つてしまふ。」

時雄「水島さん、裸にしてよ。」

園長「ひどくすると、蓑蟲が死んでしまひますよ。ほら袋にはいつてゐてせう。此の袋を上手に破かないと、蓑蟲は潰れて汁を出しちやいますよ。」

時雄「鋏で切つて。」

園長「よし、切つて上げませう。」

園長「蓑袋を切割いて蟲を出す。」

時雄「出た、出た。寒いからあんなにしてら。」

園長「寒いね蓑蟲、蓑を取られて眞つ裸だ。」

時雄「枯れた葉つ葉を採つて来て、着せない？」

園長「着せませうね。今度は綺麗な着物をね。」

時雄「うん、どんな着物。」

園長「温いやうに毛絲の着物にしよう。」

時雄「いゝね。どやつて着せるの。」

園長「時雄さん叔母さんに色々な毛絲を貰つていらつしやい。」

時雄庭と反對側の、園長の居間兼客間書齋の窓の所へ行つて、大聲に、

時雄「叔母さん、色々な毛絲ちやうだい。」

叔母隣の家から返事する。

「はゞ。どんな色。」

時雄「赤とね、青とね、白と、緑と、それからえーと。」

園長「紫とね。皆少しづつていゝのよ。」

叔母窓の下へ五色の毛絲を持つて来る。園長小さいボール箱の蓋を持つて來て裸の蓑蟲を入れる。

園長「時雄さん、さあ此の毛絲を細く刻んで、蓑蟲へ掛けてやりませう。」

時雄「面白いね。」

二人缺で毛絲を刻む。蓑蟲毛絲の斷片が掛つても動かない。時雄手を止めて蓑蟲を凝視する。ボ

ール箱の底、五色の文を濃厚に織る。

園長「五色の着物だ、そら着ろ、やれ着ろ。」

二人蓑蟲の上へ振掛けてやる。蓑蟲身じろぎ一つ見せない。

時雄「ちつとも着物着ないね。」

園長「どうしたんでせうね、こんな綺麗な着物、早く着ればいいに。」

隣から時雄の母の聲がする。

「時雄、御飯ですよ。」

時雄養蟲から眼を放さず、動かうとしな。

園長「時雄さん御飯ですつて。早くいらつしやい。お午から又いらつしやい。」

時雄「はい。養蟲どうして置くの。」

園長「此のまゝ此處に置きませう。」

.....

二三時間の後時雄又来る。園長茶の間で縫物をしてゐる。

時雄「水島さん、養蟲は。」

園長「さどうしたか、見て御覧。」

時雄縁側へ出る大きく歡聲を擧げる。

時雄「着たよ、着たよ、ウフ、、、。」

園長飛んで行く。

時雄「アラッ、着た、着た、アハ、、、、綺麗だねえ——。」

箱の中に、五色の塵一つも餘さず、ふつくりと着込んだ養蟲が、美しい衣裳を誇らしげに、ゆつ

たりと構えて居る。

園長「養蟲さん、いゝあべへ。」

時雄「あとつちやん來んでも泣かないね。」

園長「五色のあべへて、毛絲のあべへ、養より上等。」

二人大喜びの體。

時雄「養蟲うちへ持つて行つてもいい。」

園長「いゝとも、大事になさい。あ、何か食べる物を入れてやりませう。」

園長楓の柔さうな一葉を採つて、養蟲の側に入れてやる。時雄喜色満面て箱を持つて行く。

.....

夕方突如として時雄の泣聲起る。園長隣の方へ聴耳を立てる。

時雄「お母さん。養蟲がゐないよう。」

園長駈出して隣へ行く、隣の縁側に、ボール箱の蓋がある。中に少し喰つた跡の見える楓の葉が一枚遺つてゐる。養蟲は影も形も無い。時雄の母、園長、時雄縁側の隅々、縁の下から庭の樹々まで、仔細に搜索する。

五色の衣を纏つた養蟲は完全に姿を隠してしまつた。夕闇が迫つて、秋風が吹く。

園長「養蟲やゝい、養蟲いゝ。」——終——